

盧照鄰「五悲」「釋疾文」考

加藤 文 彬

はじめに

本稿は、初唐四傑の一人である盧照鄰の「五悲」「釋疾文」中で、自己への言及が如何に為されているかに着眼し、連作の中で自らを抉出していく過程を明らかにせんとするものである。

さて「五悲」「釋疾文」について、『舊唐書』盧照鄰傳は以下の様に言及する。

後疾轉篤、徙居陽翟之具茨山、著釋疾文、五悲等誦、頗有騷人之風、甚爲文士所重。照鄰既沉痾攣廢、不堪其苦、嘗與親屬執別、遂自投潁水而死。時年四十。

（後に疾轉^{うた}た篤く、居を陽翟の具茨山に徙し、釋疾文、五悲等の誦を著し、頗る騷人の風有りて、甚だ文士の重んずる所と爲る。照鄰既に沉痾攣廢し、其の苦に堪えずして、

嘗て親屬と執別し、遂に自ら潁水に投じて死す。時に年四十なり）

これに拠れば「五悲」「釋疾文」は、晩年「疾轉た篤く」なった際に制作されたものであり、⁽¹⁾高木重俊氏が「重病の床に臥する盧照鄰の精神が、現実と幻想の間を彷徨して織りなす、特異な文学空間」と規定するが如く、そこには彼の晩年の心情が多分に表現されていると考えることができる。

しかしこれらの作品については、「頗る騷人之風」を承け、『楚辭』の文体・表現を如何に継承しているか、更にそこから音律的にどう整っていくのかに主眼を置いたアプローチが為されてきた。⁽³⁾故に、「五悲」「釋疾文」の内実については問題視されてこなかったと言つてよい。

先ずは両文の序の比較検討を行いたい。

〔五悲〕序⁽⁴⁾

自古爲文者、多以九・七爲題目。乃有「九歌」、「九辨」、「九章」、「七發」、「七啟」、其流不一。余以爲天有五星、地有五嶽、人有五章、禮有五禮、樂有五聲。五者、亦在天地之數。今造五悲、以申萬物之情、傳之好事耳。

(古自り文を爲る者、多く九・七を以て題目と爲す。乃ち「九歌」、「九辨」、「九章」、「七發」、「七啟」有り、其の流は一ならず。余以爲えらく天に五星有り、地に五嶽有り、人に五章有り、禮に五禮有り、樂に五聲有り。五は、亦た天地の數に在り。今五悲を造りて、以て萬物の情を申^のべ、之を好事に傳うるのみ)

〔五悲〕序は、『易經』繫辭上「天數五、地數五」を踏まえ「今造五悲、以伸萬物之情」と、その執筆動機は端的に示されるのみである。⁽⁵⁾ 一方で「釋疾文」序では饒舌に動機が語られている。

〔釋疾文〕序

〔余〕羸臥不起、行已十年。宛轉匡床、婆婆小室。未攀偃蹇桂、一臂連蹠。不學邯鄲步、兩足鋪匐。……覆幬雖廣、

嗟不容乎此生。亭育雖繁、恩已絕乎斯代。賦命如此、幾何可憑。今爲釋疾文三篇、以貽諸好事。蓋作易者其有憂患乎、刪書者其有棲遑乎。國語之作、非瞽叟之事乎。騷文之興、非懷沙之痛乎。〔吾〕非斯人之徒歟。安可默而無述。

(余羸臥して起たざることを、行ゆく已に十年にならんとす。匡床に宛轉し、小室に婆婆す。未だ偃蹇の桂を攀じざるも、一臂は連蹠す。邯鄲の歩を學ばざるも、兩足は鋪匐す。……覆幬廣しと雖も、此の生を容れざるを嗟く。亭育繁しと雖も、恩は已に斯の代に絶ゆ。賦命此の如し、幾何ぞ憑るべけんや。今釋疾文三篇を爲り、以て諸を好事に貽^{おこ}る。蓋し易を作る者は其れ憂患有るか。書を刪せる者は其れ棲遑有るか。國語の作^なるは、瞽叟の事に非ずや。騷文の興るは、懷沙の痛みに非ずや。吾は斯の人の徒に非ずや。安くんぞ默して述ぶること無かるべけんや)

〔釋疾文〕序では、先ず「余」の疾の有様が詳細に語られる。疾にある自己をしかと見つめた上で、易・書・國語・離騷を取り上げ、「釋疾文」を記す書き手「吾」もその伝統の中に組み込んでいる。

〔釋疾文〕は粵若・悲夫・命曰の三篇からなるが、粵若に於いて「皇考慶〔余〕以弄璋兮、肇錫〔予〕以嘉詞。名〔余〕以照

鄰、字余以昇之（皇考余を慶するに弄璋を以てし、肇めて予に錫うに嘉詞を以てす。余に名づくるに照鄰を以てし、余に字するに昇之を以てす）」と言ひ、『楚辭』離騷「皇覽揆余初度兮、肇錫余以嘉名。名余曰正則兮、字余曰靈均（皇覽て余を初度に揆り、肇めて余に錫うに嘉名を以てす。余に名づけて正則と曰ひ、余に字して靈均と曰う）」を踏まえながら、繰り返し書き手たる自己へと言及している。

すなわち「釋疾文」は、「余・吾」等の一人称を意図的に多用し——つまりは書き手が全面的に表出され——、またその姿は屈原に比擬されているということが出来る。

これらの比較から、本稿では直接的に自己を語らない「五悲」と、自己を存分に語る「釋疾文」という位置づけを行う。

その上で、「五悲」では直接的に自己を語るのではなく、自己の仮託を設定することを方法として自己否定が行われていること、その一方で「釋疾文」では書き手を「余」として表出しながら屈原に比擬し、その中で自己肯定が為されていることを明らかにする。更には、これら二つの文の関係性を究明する。

I

「五悲」は題の通り五つの「悲」、すなわち「才難」「窮通」「昔遊」「今日」「人生」の悲しみを述べ連ねていく構成となっている。

それぞれの内容については、高木正一氏が「『才の難きを悲しむ』は、才高くして世に恵まれぬ悲しみをのべ、『窮通を悲しむ』は、年少時の聲譽にも拘らず、見るかげもなくうらぶれ果てた晩年の窮状を悲しむ。また『昔遊を悲しむ』には若かりし日の官遊生活を追憶しつつ、憔悴した今のおのれに雨露の恩の及ばぬことを悲しみ歌い、『今日を悲しむ』には、現在の悲境をなげく。最後の『人生を悲しむ』には、佛家の所謂『一飢一覆は掌の如く、一生一死は輪の若き』人の世の定めを悟りえぬまま、儒・道二教にさまよつてきた歎きをのべる」と端的に述べる通りであるが、本稿ではこの様な内容の中、自己への言及が——自己の仮託を用いながら——如何に為されているかに着眼したい。

〈「五悲」才難〉

一悲曰、恭聞古之君子兮、將遠適乎百蠻。何故違父母之

中國、從禽獸於末班。……彼聖人兮猶若此、況不肖與中間。
(一の悲しみに曰く、恭しく聞く古の君子は、將に遠く百蠻に適かんとすと。何の故に父母の中國を違り、禽獸に末班に従うや。……彼の聖人すら猶お此の若し、況んや不肖の中間に與けるをや)

太伯・虞仲の如く才を有する「聖人」ですら、最終的には禽獸の如き低い身分へと身を賣したのだから、「不肖」の者は言うに及ばない、というのが悲才難の書き出しである。以後「不肖」たる者として、嵇康(嵇生玉折)・顔回(顔子蘭摧・左丘明(左丘失明)・冉耕(冉耕有疾)・孫臏(兵法作而斷足)・司馬遷(史記修而下室)等を挙げ、「高明者鬼瞰其門、正直者人怨其筆(高明なる者は鬼其の門を瞰、正直なる者は人其の筆を怨む)」とし、これらの者は「高明」「正直」なるが故にその才が十全に發揮されなかったとする。

つづいて「稽之古人則如彼、考之近代又如此(之を古人に稽うれば則ち彼の如く、之を近代に考うれば又た此の如し)」とし、「近代」の魏郡の王方、華陰の楊亨を取り上げる。彼らの才に対しては「咸能博達奇偉、覃思研精、徵孔門之禮樂、吞鬼谷之縱橫。岳秀泉澄、如川如陵。高談則龍

騰豹變、下筆則煙飛霧凝(咸な能く博達奇偉、覃思研精にして、孔門の禮樂を徴し、鬼谷の縱橫を吞む。岳秀で泉澄み、川の如く陵の如し。高談すれば則ち龍騰り豹變じ、下筆すれば則ち煙飛び霧凝る)」と最大級の賛辞を贈るのであるが、官は「郡吏」「邑丞」に留まり、結局は「才難」であつたとする。

次に語られるのは、盧照鄰の親族の「杲之」と「昂之」である。彼らの才に対しても同様の賛辞を贈るのであるが、彼らは「以方圓異用、遭遇殊時。故才高而位下、咸默默以遲遲(方圓用を異にし、遭遇時を殊にするを以ての故に才高かれども位下く、咸な默默として以て遲遲たり)」とし、適切な配置が為されなかったことと、時代に恵まれなかったこと、即ち外在的要因によって「才難」であつたとしている。

前代の才難、近代の才難、親族の才難と、徐々に自己へと近づくが、悲才難では最後まで自身の才難には言及しない。⁽⁸⁾

「釋疾文」に於いても才難は語られているが、「五悲」と異なる点は二点ある。それは「下筆則煙飛雲動、落紙則鸞迴鳳驚(下筆すれば則ち煙飛び雲動き、落紙すれば則ち鸞迴り鳳驚く)」(粵若)と、自身の才を存分に述べて自己称

揚を行っている点と、「屢下蒲帛之書、值余有幽憂之疾。

蓋有才無時、亦命也。有時無命、亦命也（屢しば蒲帛の書を下すも、余に幽憂の疾有るに値う。蓋し才有りて時無きは、亦た命なり。時有りて命無きも、亦た命なり）」（粵若）と、時に恵まれなかったことによる「余」の「才難」に言及しながらそれを「命也」とする点である。⁽⁹⁾

自己に言及せぬまま、時運に恵まれず才を十全に發揮し得なかった者達を嘆く「五悲」と、自身の才難を存分に語りながら、それを「命」として受け入れる「釋疾文」との態度の違いは一体何に起因するものであろうか。

「釋疾文」には各文の後に歌が附されている。そこには「死去死去今如此、生兮生兮奈汝何（死に去り死に去りて今此の如し、生よ生よ汝を奈何せん）」（粵若）、「麟兮鳳兮、自古吞恨無已（麟よ鳳よ、古自り恨みを吞みて已むこと無し）」（悲夫）と、「疾」の先にある自らの死を受け入れられない語り手の姿が出現している。しかし、「釋疾文」の最終篇に当たる命日に附された歌では、「倏爾而笑、汎滄浪兮不歸（倏爾として笑い、滄浪に汎びて歸らず）」として、死を受容することに成功している。

すなわち「釋疾文」は、三篇連作の中で『楚辭』特に「離騷」を踏襲しつつ、汨羅に身を投げた屈原と自らとを

比擬していくことを通じて、「疾」から「釋」き放たれること——自らの死を受容すること——が目的となっていると言える。その過程で疾にある書き手としての自己が肯定され、自らの才難も「命」として解決されていく、という構造となっているのである。

繰り返しになるが「五悲」悲才難に於いては、自己への言及は為されない。「釋疾文」にて、自己を存分に語ることが屈原との比擬、そして自己肯定の為の方法としてであったように、「五悲」も直接的に自己を語らず、仮託を表出することを方法とし、寧ろそれが却って自己を多角的に見つめ、自らを鋭く抉り出すことになっている、と筆者は考える。

II

〈「五悲」悲窮通〉

二悲曰、涙流公子、傷心久之。歷萬古以抽恨、橫八荒而選悲。有幽巖之臥客、兀中林而坐思。形枯槁以崎嶇、足聯蹠以緇皷。悄悄兮忽愴、眇眇兮惆悵。迢遙兮獨蹇、淹留兮空谷。……公子方撫其背而曳其裾曰、子非有唐之文士與、燕地之高門與。⁽¹⁰⁾昔也子之少、則玉樹金枝。及其長、則龍章鳳姿。立身則淹中不足言其禮、揮翰則江左莫敢論其詩。

……痛私門之禍速、惜公車之詔遲。豈期晦明乖序、寒燠愆度。鱗傷羽折、筋攣肉蠹、離披於丹澗之隅、殼觶於藪山之路。已焉哉、已焉哉。崑山玉石忽摧頽。事去矣、事去矣。古今聖賢悲何已。

(二)の悲しみに曰く、流涙の公子、傷心すること之久しうす。萬古を歴て以て恨を抽き、八荒に横きりて悲を選ぶ。幽巖の臥客有り、中林に兀として坐して思う。形は枯槁して以て崎嶇たり、足は聯蹠として以て緇釐たり。悄悄として忽ち愴み、眇眇として惆悵す。獨蹇に迢遙し、空谷に淹留す。……公子方に其の背を撫で其の裾を曳きて曰く、子是有唐の文士に非ずや、燕地の高門ならんか。昔子の少ければ、則ち玉樹金枝なり。其の長ずるに及べば、則ち龍章鳳姿なり。身を立つれば則ち淹中其の禮を言うに足らず、翰を揮えば則ち江左敢えて其の詩を論ずること莫し。……私門の禍速かなるを痛み、公車の詔遲きを惜しむ。豈に晦明の序に乖き、寒燠の度に愆うを期せんや。鱗傷み羽折れ、筋攣りて肉蠹なわれ、丹澗の隅に離披し、藪山の路に殼觶す。已焉かな、已焉かな。崑山の玉石忽ち摧頽す。事去れり、事去れり。古今の聖賢の悲何ぞ已まんや)

悲窮通で着眼すべきは、「涙流公子」「幽巖之臥客」が出

現している点である。「臥客」の身は枯れ果て、足は曲がりくねっている。心身「半死」「中絶」状態であり、⁽¹⁾「幽巖之臥客」は疾に伏している盧昭隣の仮託として考えることができる。ここに書き手自身を「余」として雄弁に語る「釋疾文」との明確な違いがある。

さて、「臥客」の窮と通との変貌をみて、「公子」は「天道如何、自古相嗟(天道如何せん、古自り相い嗟く)」と、天道への懷疑を呈す。これと同様の表現は、「釋疾文」命日にも「百罹兮六極、横集兮我身。長攣圈以偃蹇、永伊鬱以呻嘔。天道何從、自古多邛(百罹と六極と、我が身に横集す。長しえに攣圈して以て偃蹇し、永しえに伊鬱して以て呻嘔す。天道何ぞ從わん、古自り多く邛む)」とある。「釋疾文」ではこの後、天上に遊び太上老君・伯陽のもとを訪ねて真訣を授かる「余」の姿が描かれ、「我」の窮に端を発する「天道」への懷疑は表現次元に於いて解決されている。

一方悲窮通では、項羽・荊卿・蘇武・溫序・關羽・田横等の功績を挙げた後に、「廻首永訣、吞聲何道(首を廻らせて永しえに訣るれば、聲を吞みて何をか道わん)」とし、生死や窮通の変化は量りがたいとし、獻帝・懷王の如く窮している状態にあっても、周囲は全く気にかけないことを

嘆く。⁽¹³⁾ 結果導かれるのは、生前どの様に優れた業績を残そうが「溘臥（病に倒れる）」してしまつては無意味であり、「假使百年今上壽、又何足以存存（假使、百年上壽なるも、又た何ぞ以て存存とするに足らんや）」と、存在すること自体には意味がないという結論であつて、解決には至つていない。⁽¹⁴⁾

公子は「撫其背而曳其裾」し、また同情の「涙流」が示されている様に、表面上は前掲高木正一論文が指摘する通り「臥客を慰め」ているのではあるが、それが却つて鋭い批判となつてゐることに着目したい。批判する「公子」と批判される「臥客」とに分け、自己を客観的に見つめてゐるのである。

悲窮通を承け、つづく悲昔遊でも仮託が出現する。

〈「五悲」 悲昔遊〉

三悲曰、奇峰合沓半隱天、綠蘿蒙龍水潺湲。因嵌巖以爲室、就芬芳以列筵。川谷縈廻兮迷路徑、山嶂重復兮無人煙。當谿谿之洞壑、臨決咽之奔泉。中有幽憂之子、長寂寞以思禪。暮色躊躇、朝思綿綿。形半生而半死、氣一絕而一連。
(三)の悲しみに曰く、奇峰は合沓して半は天を隠し、綠蘿は蒙龍として水は潺湲たり。嵌巖に因りて以て室を爲り、

芬芳に就きて以て筵を列ぬ。川谷は縈廻して路徑に迷い、山嶂は重復して人煙無し。谿谿の洞壑に當り、決咽の奔泉に臨む。中に幽憂の子有り、長しえに寂寞して以て禪を思ふ。暮には色躊躇たり、朝には思綿綿たり。形は半生半死、氣は一絶一連なり)

悲昔遊では、「幽憂之子」が表出されている。「幽憂之子」は「自言少年遊宦、來從北燕。淮南芳桂之嶺、峴北明珠之川。東魯則過仲尼之故宅、西蜀則耕武侯之薄田（自ら言う少年遊宦し、北燕従り來る。淮南の芳桂の嶺、峴北の明珠の川。東魯は則ち仲尼の故宅を過り、西蜀は則ち武侯の薄田に耕す）」と述べ、嘗ての「遊宦」へ言及する。この遊宦の記述は盧照鄰自身の経歴をある程度なぞつたものであり、かつ盧照鄰の号が幽憂子であることから、⁽¹⁵⁾ここで「幽憂之子」は先述の公子・臥客以上に書き手に近づいた仮託として理解してよい。

過去の榮華を想起することは、そうあり得ない現状を見つめ直す契機となる。

一朝憔悴無氣力、曝骸委骨龍門側。當時相重若鴻鐘、今日相輕比蟬翼。代情兮共此、何余哀之能得。使我孤猿哀

怨、獨鶴驚鳴、蘿月寡色、風泉罷聲。嗟昊天之不弔、悲后土之無情。松架森沈兮戶內掩、石樓摧折兮柱將傾。竊不敢當雨露之恩惠、長痛恨于此生。

（一朝にして憔悴して氣力無く、骸を曝し骨を委つ龍門の側。當時は相い重んぜらること鴻鐘の若く、今日は相い輕んぜらること蟬翼に比す。代情此を共にすれば、余何の哀しみか之れ能く得んや。我が孤猿をして哀怨し、獨鶴をして驚鳴せしめ、蘿月は色寡く、風泉は聲罷む。昊天の弔らざるを嗟き、后土の情無きを悲しむ。松架は森沈として戸内に掩い、石樓は摧折して柱將に傾かんとす。竊かに敢えて雨露の恩惠に當らざるに、長しえに此の生を痛恨す）

悲才難からここまで、一人称は意図的に避けられてきたが、ここで「余」「我」という一人称が二度にわたって出現していることは着眼すべき点である。無論これは「幽憂之子」の「自言」中の一人称であり、直接的に書き手（盧照鄰）を示すものではないにしろ、仮託から漏れ出した書き手の意識をここに見ることができるといえる。

それを裏付けるのが悲今日の記述である。

III

悲今日では、旧友と過ごした昔時の榮華と、疾に倒れた現在の状況が対比されて語られた後に、「河瀆漂母」「隴上樵夫」が出現する。

〈「五悲」悲今日〉

則有河瀆漂母、隴上樵夫。盤餐帶粟、粥麵兼麩。藜羹一簋、濁酒一壺。夫負妻帶、男歡女娛。攀重轡之岩峇、歷飛澗之崎嶇。哀王孫而進饋、問公子之所須。因謂余曰、可憐可憐。聖人之過久矣、君子之罪多焉。

（則ち河瀆の漂母、隴上の樵夫有り。盤餐は粟を帶び、粥麵は麩を兼ね。藜羹一簋、濁酒一壺。夫は負い妻は帶び、男は歡び女は娛しむ。重轡の岩峇を攀りて、飛澗の崎嶇を歷たり。王孫を哀みて饋を進め、公子の須むる所を問う。因りて余に謂いて曰く、憐れむべし憐れむべし。聖人の過ち久しく、君子の罪多し）

悲今日で着眼すべきは、「余」という一人称が出現している点である。先の「幽憂之子」のものとは異なり、これは明らかに書き手（盧照鄰）としての「余」である。悲窮

通・悲昔遊で繰り返された自己批判によって、表現の外側にある書き手が表現内に引き摺り込まれている、と読みた
い。

漂母・樵夫が「王孫（である余）」を哀れんで「饋」を進め、⁽¹⁶⁾「公子（＝王孫＝余）」に「須」めるところを問う。

漂母・樵夫は、「自昔相逢、把臂談玄、横雕龍於翠尾、飛縞鳳於瓊筵。各自雲騰羽化、谷變鶯遷。鳴香車於闕下、曳珠履於君前。豈憶荒山之幽絕、寧知枯骨之可憐（昔自り相い逢わば、臂を把りて玄を談じ、雕龍を翠尾に横たえ、縞鳳を瓊筵に飛ばす。各自雲騰羽化し、谷變鶯遷す。香車を闕下に鳴らし、珠履を君前に曳く。豈に荒山の幽絶を憶わんや、寧ぞ枯骨の憐れむべきを知らんや）」と、旧友の出世と病に倒れた惨めな「余」の有様とを対照的に語り、「枯骨」たる「余」が誰にも顧みられないことを言う。更には、「傳語千秋萬古、⁽¹⁷⁾寄言白日黃泉。雖有羣書萬卷、不及囊中一錢（語を千秋萬古に傳え、言を白日黃泉に寄す。羣書萬卷有ると雖も、囊中の一錢に及ばず）」とし、後世の評価を期待して群書萬卷を残しても何の意味も為さないという強い否定が行われている。

悲窮通で語られていた、疾にある自己の惨状を再度「枯骨」として捉えなおし、悲昔遊で「幽憂之子」が語った、

過去の榮華と対比された悲慘な現状を再び確認した上で、それらが書き手と近い「余」に向けられているという点に於いて、より強烈な自己否定が行われているのである。

ここまで仮託を用いながら、徹底的に自己否定（仮託から仮託への批判→仮託から書き手としての「余」への否定）が為されていたのであるが、多角的な自己否定の先に帰趨するのは、一体どの様なものなのか。

「五悲」の最後に置かれるのは悲人生である。悲人生では、儒・道の二者に対して、仏家の立場にある「超然之大聖」が語りかけるといふ構造になっている。その内容は、「儒」では「無我」「無生」「無愛」「無行」等の仏家の境地には至ることができないとし、⁽¹⁸⁾「道」では「三昧」「六通」等の境地には至ることができない、⁽¹⁹⁾というものである。

〈五悲〉悲人生

所言未畢、儒道二客離席、再拜稽首而稱曰、大聖哉。丘晚聞道、聃今已老、徒知其一、未究其術。何異夫戴盆望天、倚杖逐日。蒼蒼之氣未辨、昭昭之光已失。嗚呼、優優羣品、遑遑衆人、雖鑿其竅、未知其身。來從何道、去止何津、誰爲其業、誰作其因。一翻一覆兮如掌、一生一死兮若輪。不有大聖、誰起大悲。請北面而趨伏、願終身而教之。

(言う所未だ畢^おわらずして、儒道の二客は離席し、再拜稽首して稱して曰く、大聖なるかな。丘は晩に道を聞き、聃は今已に老い、徒だ其の一を知り、未だ其の術を究めず。何ぞ夫の盆を戴せ天を望み、杖に倚りて日を逐うに異ならんや。蒼蒼の氣未だ辨ぜず、昭昭の光已に失う。嗚呼、優優たる羣品、遑遑たる衆人、其の竅^{あな}を鑿^{うが}つと雖も、未だ其の身を知らず。來たりて従うは何れの道、去りて止むは何れの津、誰か其の業を爲し、誰か其の因を作さん。一翻一覆は掌の如く、一生一死は輪の若し。大聖に有らずんば、誰か大悲を起さん。請う北面して趨伏し、願わくは終身之に教えんことを)

「大聖」の言が終わらぬうちに、「儒道二客」が席を立ち、大聖に教えを請う。「釋疾文」粵若に「先朝好吏、予方學於孔墨。今上好法、予晚受乎老莊（先朝吏を好めば、予方に孔墨に學ぶ。今上法を好めば、予晩に老莊を受く）」とある様に、これも儒・道に傾倒した自己を仏家の立場から否定するものとして、つまりは自己否定の構造を読むことができる。

確かに盧照鄰は「寄裴舍人諸公遺衣藥直書」で「余不幸遇斯疾、母兄哀憐、破産以供醫藥。…晚更篤信佛法（余不

幸にして斯の疾に遇い、母兄哀憐し、産を破りて以て醫藥に供す。…晩に更に篤く佛法を信ず）」と述べる様に、疾に侵された後に仏教へ傾倒している。

晩年仏教に傾倒したことは彼自身が述べており、「五悲」で自己否定の先に最終的に仏家の境地に到達して救済された、と結論づけるのは早急であり、「五悲」「釋疾文」両文の關係性の上で把握しなくてはならない。

おわりに

「五悲」では、自己を繰り返し否定することが目的となっていたと言える。自己否定には、自らを客観的に見つめる視点が必要とされる。そこで「五悲」では、表現内部に仮託を複数表出することによって、自己を客観的かつ多角的に批判・否定していた。

悲窮通に於いては、仮託（涙流公子）が仮託（幽巖之臥客）を批判し、悲昔遊では仮託（幽憂之子）の独白を通じて自己批判が為されていた。

悲今日では、悲窮通・悲昔遊で確認された悲惨な現状が漂母によって否定されていたが、その否定は表現次元に引き摺り込まれた書き手「余」に対してであった。ここに至って、より強烈な自己否定が行われていた。

徹底した自己否定が行われた後、それに反発する形で自己肯定が行われる（否定は、止揚されるべき否定として）こと、その様に表現することで現実にある書き手が救済されること、それが自己否定を行うことの意味であるというのが筆者の立場であるが、「五悲」では自己否定→自己肯定のドラマは生まれていない。「仏」の境地が一つの到達点として突如提示されているに過ぎない。

繰り返された自己否定から反発する形で表現されたものこそ、「釋疾文」に於ける書き手「余・吾・予・我」の屈原との比擬、並びに「離騷」的世界で真訣を授かり疾（死）を受容する語り手（＝書き手）の姿、そしてその過程で行われる自己肯定なのであり、「五悲」「釋疾文」は、このような関係性の中で成立していたのである。

注

- (1) 「五悲」「釋疾文」の制作年について、李雲逸校注『盧照鄰集校注』（中華書局、一九九八）は永淳元（六八二）年とし、傅璇琮『盧照鄰楊炯簡譜』（徐明霞點校『盧照鄰集楊炯集』、中華書局、一九八〇に所収）は「釋疾文」の制作年を調露二（六八〇）年とする。

- (2) 高木重俊「盧照鄰の文学」（加賀博士退官記念『中国文史哲学論集』、講談社、一九七九。後に高木重俊『初唐文学論』、研文出版、二〇〇五に所収）

- (3) この傾向は初唐期に対する先行研究が、当時の文学趨勢から如何にして盛唐詩という完成形へ移行していくかという点特にその音声的・表現形式的接近に主眼を置いて展開されてきたことに起因する。

- (4) 本稿で使用するテキストは李雲逸校注『盧照鄰集校注』（中華書局、一九九八）に拠った。尚、全唐文・文苑英華は「五悲文」に作る。

- (5) 「九歌」「七啟」等と「五悲」との関連性については別稿を予定している。

- (6) 高木正一「盧照鄰の伝記と文学」（『立命館文学』一九六、一九六一。後に高木正一『六朝唐詩論考』、創文社、一九九九に所収）

- (7) 『史記』周本紀に「長子太伯・虞仲知古公欲立季歴以傳昌乃二人亡如荊蠻、文身斷髮、以讓季歴（長子太伯・虞仲は古公の季歴を立てんと欲するを知り以て昌に傳へ、乃ち二人亡れて荊蠻に如き、身に文して髪を斷ち、以て季歴に讓る）」とある。また、王粲「七哀詩」の「復棄中國去、遠身適荊蠻（復た中國を棄て去り、身を遠ざけて荊蠻に適く）」とある。

- (8) この後も自己への言及は見えず、『莊子』を踏まえ「至道之精、窅窅冥冥。至道之極、昏昏默默（至道の精は、窅窅冥冥たり。至道の極は、昏昏默默たり）」と述べた後、「太平之

代、萬物朏朏、凡聖脗合、賢愚滑昏（太平の代は、萬物朏朏として、凡と聖と脗合し、賢と愚と滑昏す）として、太平の代には凡・聖、賢・愚の区別がなかった——故に「才難」も生じなかったとする。

(9) この後「天蓋高兮不可問、地蓋廣兮不容人。鍾鼓玉帛兮非囿事、池臺花鳥兮非我春（天は蓋し高くして問うべからず、地は蓋し廣くして人を容れず。鍾鼓玉帛は吾が事に非ず、池臺花鳥は我が春に非ず）」とし、全方向的な拒絶から浮き彫りにされる自己が示されている。

(10) 「新唐書」宰相世系表に「盧氏出自姜姓。…田和纂齊、盧氏散居燕・齊之間（盧氏は姜姓自り出づ。…田和齊を篡い、盧氏燕・齊の間に散居す）」とある。

(11) 「骸骨半死、血氣中絶。四支萎墮、五官缺缺。皮褻積而千皺、衣聯褻而百結。毛落鬢禿、無叔子之明眉。唇亡齒寒、有張儀之羞舌。仰而視睛、翳其若膏。俯而動身、羸而欲折。神若存而若亡、心不生而不滅（骸骨は半ば死し、血氣は中ば絶つ。四支は萎墮し、五官は缺缺す。皮は褻積して千皺あり、衣は聯褻して百結あり。毛落ち鬢禿げ、叔子の明眉無し。唇亡び齒寒く、張儀の羞舌有り。仰ぎて睛を視れども、翳ること其れ瞽の若し。俯して身を動せど、羸せて折れんと欲す。神は存するが若く亡ぶが若く、心は生ぜずして滅せず）」

(12) 「釋疾文」命曰は、伯陽の言を受けた後に「余於是乎嗒然而喪其偶、倏爾而失其知（余是に於いてか嗒然として其の偶を喪い、倏爾として其の知を失う）」とする。

(13) 「及夫獻帝偷生、懷王客死、哀西都之城闕、憶南荆之朝市。鳳凰樓上隴山雲、鸚鵡洲前吳江水。一離一別兮、漢家宮掖似神仙。獨坐獨愁兮、楚國容華競桃李（夫の獻帝の偷生、懷王の客死に及びては、西都の城闕を哀しみ、南荆の朝市を憶う。鳳凰樓上隴山の雲、鸚鵡洲前吳江の水。一離一別するも、漢家の宮掖は神仙の似し。獨坐獨愁するも、楚國の容華は桃李を競う）」

(14) 「別有士安多疾、顔譏不起。馬援困於壺頭、冉耕悲於牖里。平生書劍、宿昔琴檠、研精殫於玉冊、博思浹於銅渾、思欲爲龜爲鏡、立德立言、成天下之臺臺、定古今之諄諄、一朝溘臥、萬事寧論（別に士安の疾多く、顔譏の起たざる有り。馬援は壺頭に困しみ、冉耕は牖里に悲しむ。平生の書劍、宿昔の琴檠、研精は玉冊に殫き、博思は銅渾に浹し、龜と爲り鏡と爲り、徳を立て言を立て、天下の臺臺を成し、古今の諄諄を定めんと思欲するも、一朝溘臥すれば、萬事寧くんぞ論せん）」

(15) 「幽憂子白。…」（與在朝諸賢書）や「幽憂子學道於東龍門山精舍」（與洛陽名流朝士乞藥直書）等の用例がある。

(16) 「哀王孫而進饋」は、直接的には韓信と漂母の逸話を踏まえているが、『楚辭』招隱士「攀援桂枝兮聊淹留。虎豹鬬兮熊羆咆。禽獸駭兮亡其曹。王孫兮歸來、山中兮不可以久留（桂枝を攀援し聊か淹留す。虎豹鬬いて熊羆咆ゆ。禽獸駭き其の曹を亡う。王孫歸り來れ、山中は以て久しく留まるべからず）」も考慮すべきであろう。疾に臥している自己を招隱士中の「王孫」と重ね合わせていると考えたい。実際、悲昔遊に

於いて「幽憂之子」の居る場所は招隱士を踏まえている。

(17) 底本は「傳與千秋萬古」に作るが、文苑英華に従った。

(18) 「若夫正君臣、定名色、威儀俎豆、郊廟社稷、適足誇耀時俗、奔競功名。使六藝相亂、四海相爭。我者遺其無我、生者哀其無生、孰與乎身肉手足、濟生人之塗炭、國城府庫、恤貧者之經營、捨其有愛以至於無愛、捨其有行以至於無行（夫の君臣を正し、名色を定め、威儀と俎豆と、郊廟と社稷の若きは、適たま時俗を誇耀するに足るも、功名を奔競す。六藝をして相い亂し、四海をして相い爭わしむ。我なる者は其の無我を遺て、生なる者は其の無生を哀しむは、身肉手足もて、生人の塗炭を濟い、國城府庫もて、貧者の經營を恤い、其の有愛を捨てて以て無愛に至り、其の有行を捨てて以て無行に至るに孰與れぞや）」

(19) 「若夫呼吸吐納、全身養精、反於太素、飛騰上清、與乾坤合其壽、與日月齊其明、適足增長諸見、未能永證無生、孰與夫離常離斷、不始不終、恒在三昧、常遊六通。不生不住無所處、不去不滅無所窮（夫の呼吸吐納し、全身養精し、太素に反り、上清に飛騰し、乾坤と其の壽を合わせ、日月と其の明を齊しくするが若きは、適たま諸見を増長するに足るも、未だ永しえに無生を證する能わざるは、夫の常を離れ斷を離れ、始せず終らず、恒に三昧に在り、常に六通に遊び、不生不住にして處る所無く、不去不滅にして窮まる所無きに孰與れぞや）」

(20) 拙稿「王績「山中獨坐自贈」「自答」詩考——否定的媒介

としての陶淵明像——」（『日本中国学会報』六十七、二〇一五）

（茨城工業高等専門学校）

本稿は科研費（若手研究19K13893）の助成によるものである。